

道心



禅昌寺通信「道心」第23号

編集 日光山 禅昌寺「道心」編集室

発行 平成18年10月15日

〒732-0002 広島市東区戸坂山根3-2-7

TEL 082-229-0618 FAX 082-229-0822

E-mail: zenshoji@bronze.ocn.ne.jp

ホームページ <http://www.zenshoji.org/>

続

扱りの所

よりどころ

日々の営みの基準は……

無常^{むじょう}憑^{たの}み難^{がた}し、知らず露^{ろう}命^{めい}いかなる道^{みち}の草^{くさ}にか落ち^おちん、身^み已^{すで}に私^{わたし}に非^{あら}ず、命^{いのち}は光陰^{こういん}に移^{うつ}さず暫^{しば}くも停^{とど}め難^{がた}し、紅顔^{こうがん}いづくへか去^さりにし尋^{たず}ねんとするに蹤^{しゆ}跡^{せき}なし、熟觀^{じよくくわん}する所に往^{おう}事^じの再^{ふた}び逢^あふべからざる多^{おほ}し、無常^{むじょう}忽^{たち}ち^に到^{いた}るときは国^{こく}土^ど大臣^{だいじん}親^{しん}臨^{りん}從^{じゆ}僕^{はく}妻^{さい}子^し珍^{ちん}宝^{ほう}たすく無^なし、唯^{ただ}独^{ひとり}り黄泉^{こうせん}に趣^{おもむ}くのみなり、己^{おれ}に隨^{したが}ひ行^いくは只^{ただ}是^{これ}れ善^{ぜん}惡^{あく}業^{ごう}等^{らう}のみなり。

禅昌寺住職 横山 正賢

私は今年五月体調をくずした訳ではないが、定期の健康診断で甲状腺に悪いものが見つかり、切除手術のため十日ばかり入院した折りに、頭をよぎるものがあった。それは、「私は五男二女七人兄弟の次男として育った、お陰でみんな元気で今日いるが、そう遠くない将来、どういう順番で逝くことになるのかな」と自分の終焉^{しうえん}を意識させてくれた一瞬だった。

五月十六日無事に手術を終えて退院し、五月十八日のことである、東広島市に居住している九才年下の妹の家族から、妹が脳出血を起こして緊急入院をしたと知

らせがあり、数日後病院へ見舞いに行く
と、妹は集中治療室にいてその様子は、
医師は夫や娘達に生死は五分五分と言わ
れたと、五分に期待を懸けて祈る思いで
いることを感じた。

何人もの終焉を見てきた私は、「あー
もはやあと数日の命だな」と思いつつ、
つい二週間ほど前、自分の入院中に頭を
よぎった思いが現実となり六月六日還暦
で急逝し無常の現実^{じつじ}に直面した。

妹は十年ほど前から透析をうけてはい
たが比較的元気で、歌のサークルや女性
会・地域社会の人々との交流で多くの友
人達に惜しまれながら逝ったのだなど葬
儀を通して分かった。

今年三月大本山永平寺より私宛に古希
の祝いの品が届いた。改めて古希という
ことを意識して寺の総代さん達との懇親
の席で、「みんなも祝ってくれにや」と言
ったことが元で総代さん達が祝いの席を
設けて下さることになった。

このことを日頃昵懇^{じつこん}にしている異業種
交流の仲良し会の先輩に話したところ、
「あんたーなんにも、わかつとらんのー」
「Kさんの古希・喜寿の祝いによばれたで
はないか、わしもそれに習って古希には
仲間をよんで祝ったではないか」「ぽんさ
んは日頃偉そうなことをゆうとるが何も
分かつとらんノー」と窘められた。

今では八十才九十才と長命な人は珍し
くないが、私の子供の頃は六十・七十と
いえば大年寄りという印象であった、「古
希」は中国の詩人杜甫^{とほ}（西暦七一二～

七七〇年）の詩の一節「人生七十年古来
希^{まれ}なり」に由来するとは聴いていたが。

七十年の齢を無事に生かされたことを
感謝して日頃世話になる昵懇^{じつこん}の人を招い
て感謝の宴を持つものだと言論されて恥ず
かしながらその通りだなと認識を新たに
した次第だ。

その後^{のち}に開かれた、総代さんの主催に
よる祝いの席は、一番長老の九十一才を
始め出席者三十一人中十二人の年長者の
中で赤恥^{せきち}をかけた二席であった。

数年前一回り後輩に「禅昌寺さんは幸
せですね、後継者は出来たし、言いたい
ことは言ってこられたし、やりたいこと
はしっかりやってこられたし」と言われ
て、私は誤解されていることを残念に思
った。私自身は何時^{いつ}もたどたどしい歩み
の中で、一度も自信を持って遣り果せた
ということ^{こと}はなかったように思っている
ことが理解^{りかい}されていないことを思った。

古希の人生を振り返ってみるとき、
暗中摸索^{あんちゅうもくさく}する歩みの中で何時も、人や
事々物々に出会って生かされ、思い悩ん
だどん底のところ^{そこ}で光明^{くわうめい}がさし生かされ
てきたことを感謝している。

言わなければならないと思つて言つた
こと・私が遺らなければならないと信じ
てやってきたことも見方や受け止め方で、
傲慢^{ごうまん}や野心家とされることを教えられた。

けれどもやはり言わなければならない
ことを言わずにいる人が多くなることは、
それだけ世の中が無責任になつていくこ
とを感じる。

欠点を長所に、 曲がりの特徴と見てください。

愛知専門尼僧堂堂頭 青山 俊董

先日Kさんのお家へ、おばあちゃまの
一周忌に参らせていただきました。法要
のあと、お茶と一緒に出された生菓子に
は、ひどく反ってしまった黒文字（樹皮
の黒い、つまようじの一種）が添えられ
ておりました。

そこに居合わせた方々も特に親しい
方々でしたので、反った黒文字をとりあ
げながらこんなお話を致しました。「果物
やケーキにはフォーク、漬物などはつま
ようじ、生菓子には黒文字と、きちんと
使い分けて出していただくとうれしいも
の。でも、いま黒文字をふだん準備して
あるお家は少ないのです。この黒文字は
材料となったクロモジの木に特有の、み
どり色の切り口と香りを楽しむものです

が、お客さまに出す時は必ずしつとりと
ぬらし、使う直前にそのしめりを拭きと
って出すものです。

しかし黒文字は片側だけに皮を残して
作られてあり、そのうえ使うたびにぬら
しますから、だんだん反ってしまいます
ね。反ったまま出したのではみつともな
いし、使いにくくもあります。

反ってしまった黒文字はどうすればい
いのでしょうか？

そんな時は、少し早めに水につけておい
て、よくしめったところで曲がりをまっ
すぐになおして出すと、見たところもよ
いし使いよくもなりますね」

そんな黒文字談義を皆様と一緒にお茶を
いただきながらなるほどなるほどとつな

ずきながら聞いてくださっていたAさん
が、突然私にいたずらっぽい笑顔を向け
ながら、「俺みたいに曲がっちゃまった者は
どうしたらいいね」と質ねてきました。

すねなすび、馬役あいつとめたり

そのくつたくな口調につられて、
みんな大笑い。私も思わずふきだしなが
ら、「自分で自分が曲がっていると気づい
ている人は曲がついていない証拠でしょ
うね。それからもう一つ、曲がりを生かせ
ばいいのね」とお答えして、さらに次の
ような話をいたしました。

「すねなすび馬役あいつとめたり」と
いう句があるんですよ。お盆の精霊棚に、
お宗派や地方によって作らないお家もあ
りますけれど、多くのお家では茄子やき
ゅうりで牛や馬を作りますでしょう。年
に一度、ご先祖さまがお客に来られる。
おいでになる時は一刻も早く、というの
が早馬なんですってね、これはきゅうり
で作ります。お帰りはなるべくごゆつく
り、というので茄子で牛をつくり、荷縄
で茹でたうどんをかけますね。この馬や
牛を作るのに、お店で売っているような
行儀のよい、まっすぐなのは面白くない。
畑で自然に曲がったり、胴がしまってい
たり尻がふくらんだりしているのを選ん
できてすすきなどの脚をつけますと、首

をもたげた元気のよい牛や馬になるわけ。ちょうどそのように、曲がりを生かせばよいのですよ」

京都大学の元学長の平沢興先生は、「欠点に気になるうちは駄目ですね。欠点が長所に見えてこなければ」とおっしゃっております。これは大変なことですが、きゅうりや茄子ならまだ簡単です。花などは曲がついているほど面白い。けれど人間の曲がり、欠点が気にならないばかりか長所に見えてこなければ駄目だとおっしゃる。

わがままな人間のメカネには欠点がある点と見え、欠点に気になるだけならまだいいのですが、気に入らない人、自分にとって都合な人のこととなると長所さえも時には腹の立つ材料になってしまいます。たとえば丁寧だということは悪くいえばノロマということになりまして、し、仕事が早いということは、見方をかえれば雑だということになり、一つのことに一途だということは頑固とか偏屈といいかえることができる一面を持ちあわせていることになりました。

賢い人“正しい人”ばかりが 集まるところは地獄絵に

禅門に「その智には及ぶべくも、その愚には及ぶべからず」という言葉があり

ます。人はみな誰よりも利口になろうとし、また少しでも利口に見せようと背のびし、それが裏目に出ると、人を強いて見下そうとして七顛八倒いたします。人の長所を素直に認めると同時に、自分の欠点や愚かさをごまかさずに見つめてゆくということは至難なことです。本当に賢い人というのは、こういうおのれの愚かさを知り、おのれの欠点を素直に認めることができる人のことではないでしょうか。妙好人（出世に執着せず、信条に生きる人）と呼ばれた浅原才市さんは、できあがってきた自分の肖像画を見て、「これは私の肖像画ではない。私の頭には角が生えている」と言って、自分からその肖像画に二本の角を描きこんだと伝えられております。この浅原才市さんと同じ明治・大正時代に山陰の地で生まれ育ち人々から「妙好人」としたわれていた「因幡の源佐さん」は、その生涯に一度も「誰々は悪い」と言ったことがなく、誰よりも悪い自分のことしか話さなかった、といひます。ある時、村人が集まって偉いお坊さんのありがたい話を聞かせてもらったあと、一人の男が「おっさん、このわしや偽同行だい。寺に詣れば阿弥陀さんの前に出て、念仏貰うけど、家に帰ってくると忘れてしまつて、全くわしや偽同行だいなあ」というのを聞いた源佐さん、「偽になつたらもうええだ。なかなか

か偽になれんのでう」と言つたそうです。光に照らされてこそ知ることができ、自身身の闇であり、私自身の愚であり、偽物でしかない私の姿なのです。光に照らされて、私は愚か者、偽物と知ることができた人同士が集まるところに争いはありません。光に照らされない人ほど、おのれの闇や愚に気づかないまま、私は賢いと思ひ、私は絶対に間違つていないと思ひこむ。そういう人の多い世界、たとえば職場、集団、サークル、家庭などではいつも争ひは絶えず、その人のゆくりところに必ず地獄絵が展開されています。最後に、詩人の堀口大学が新春の歌会始でうたつた歌を紹介しましょう。

深海の 光遠きに住むものは
ついに眼を失つとあり

光のとどこかない深い海に住んでいる魚は、ものを見る目まで失つてしまふ——と詠じた歌ですね。でも、私たちだつていつの間にか、この気の毒な魚と同じになつてしまつていくことが多いのです——。



第6回

ジョイントコンサート

Tsukimi 寺
ピアノ&フルート

フルートコンコード広島 太田 順子



去る10月7日(土)午後6時30分より禅昌寺におきまして「第6回「Tsukimi」寺ジョイントコンサート」が開催されました。このコンサートは平成13年より始まった企画で、音楽を通じてお寺と地域社会をより近づけたいという趣旨で続けられています。加えて、禅昌寺道心会やNPO法人松笠山の会の方々などで結成された「フルートコンコード広島を支援する会」のご尽力によりこのコンサートは支えられ、売上金はフルートコンコード広島の活動資金としてご寄付戴いております。

演奏は、フルートコンコード広島の主宰である大代啓二が毎回いろいろなゲスト奏者を招いて共演するという形で、ハープの井上久美子氏、ギターの佐藤紀雄氏、チェンバロの中野振一郎氏など、現在日本を代表する演奏家ばかりです。それぞれ個性的な方で、今でも鮮明に各回の奏者、コンサートの雰囲気がい出されます。また、大きい楽器は当日に搬入するのですが、これも上手いのかどうか準備に腐心するところ。一昨年エリザベト音大からお借りしたチェンバロなどは、音大のエレベーターにはほんの数センチの差で入らず、運送屋さんといろいろ試した挙げ句4人で階段を一段ずつ降ろして戴き、私にとっては最大の不覚となりました。

今年は「題名のない音楽会」や「世界一受けたい授業」などのテレビでお馴染みの、作曲家でピアニストの青島広志氏をお招きしました。ピアノとフルートという組み合わせですので、例によってピアノは当日搬入するつもりでおりましたが、ご任職が見

かねて本堂にピアノを入れてくださり莫大な経費を節約することができました。有名な青島氏の出演ということでチケットの売れ行きも良く、今年はどうやって混乱無くお客様に座って戴くかそればかりが心配でした。しかし、スタッフの皆さんやお客様の協力のおかげで何とか大きな混乱もなく、終了までの約2時間、会場は演奏中の静寂とトーク中の笑いの渦にのみこまれました。過去最高の来場者数約450名、皆さん「楽しかったです」と言い笑顔で家路につかれ、そして何よりこのコンサートのタイトルである「Tsukimi」の通り素晴らしい満月が夜空に輝き、申し分の無い出来栄となりました。

このコンサートの素晴らしい所は、本当に誰も私利私欲無く、常に少しでも良いものをという気持ちで繋がってくださっている点です。私を含めフルートコンコード広島のメンバーも当日の午後よりお手伝いに参加しますが、禅昌寺道心会・松笠山の会・ボイススカウトの方々が設営から運営まで全てボランティアで動いてくださり、そのことに一番感動するのです。コンコードのメンバーも同じように感動しています。この出会いに心から感謝いたします。そしてそれに応えられるコンサートを作っていくなくてはと責任を新たに感じる次第でございます。

来年は在京有名オーケストラ奏者をお招きする予定です。勿論ピアノも使用します。ますます良いコンサートにして参りますので、どうぞ来年のご来場お待ち申し上げます。

続

ガンと同居となった この五体をどうしよう！

元氣印の私もほんの初期の癌とはいえ全身麻酔での手術の影響か、甲状腺を半分切除したからか、古希に相応しい体力となったようで、そろりそろりと活きたいと願っている。明日は貴方かもしれないから……参考になればという思いで綴ります。

道心庵主

皆さんのアドバイスを素直に受け入れて五月七日(日曜日)夕刻入院、五月八日(月曜日)手術することとした。

入院手術に当たって四月二十六日(水曜日)手術前診察により心電図・血圧測定等健康チェックと手術の説明があり、手術の結果「反回神経麻痺」を起こすこともある、その時は元の声は出せなくなる恐れがあることなど細かい説明があった。

この時、手術を執刀する四十代半ばの医師が、手術を前にして不安であろう私を、安心して手術に望ませようと氣遣った一語一語に配慮された言葉のなかに、「悪いところを取ってしまえば、後は天寿を全うできますよ！」とまじめに説得力のない、決まり文句を聴かされたような気がして、からかい半分に「天寿って明日死んでも天寿でしよう……」「そ

りやそうですね」とおろおろさせてしまった。純ならない患者と思つたに違いない。

五月六日(土曜日)グランドピアノの寄贈をうけて、百人程の客を招いて披露のコンサートとワインパーティーを開いたその席で、明後日は手術「二度」と歌は歌えなくなるかもしれない」という思いから「孫たちにおじいちゃんの歌声を聴かせておきたい」という万感の思いをこめて「赤とんぼ」「故郷」を歌った。普段は音痴な私ではあるが「最後かもしれない」と言う思いが、眠っていた魂を揺らせたのか？ お世辞なのか喝采を戴いて、翌七日午後七時に入院し五月八日(月曜日)無事に手術は終わった。幸いに声の発生を左右する反回神経への影響はほとんどないほど手術の結果に安堵した。入院は連休の最後の日とあつて病棟は閑散としていた。病室は二人部屋であつたが、金曜日まで術後の痛みで苦しい間私一人で助かつた。たぶん婦長さんのご配慮があつたことを感謝している。

わずか十日の入院で多くの事を学んだ。

食事は献立の氣配りが伝わってくる、薄味でどれもみな美味しかった。しかしそれを食い散らかし、投げやりに食した様子が分かるような食べ方をする人、折角出されたお粥には手もつけないで、買ってきたカップラーメンを食べている人には驚いた。

曹洞宗の食事作法「五感の偈」の四番目に「四には正に良薬を事とするは形枯を療ぜんが為なり」とあるように、三度三度の食事を嗜好として戴くか健康を養う「良薬」として

戴くかによつて健康には大変な違いであると思ふ。

さらに思ったことは病院に病人がいることは当たり前だが、考えさせられることがあつた。病氣と病人は別だと思つたことだ。

術後の痛みの激しいときは氣づきようもないが、術後三日もたてば痛みは薄れてきて病院という暗さが氣になる。その中で看護士たちが一生懸命に明るく振る舞うように優しくいたわってくれる一語一語が伝わってくる。病に対する不安のあることは誰も同じであるが、不安を募らすあまりに投げやりな姿勢が氣になった。心も体も病んでくると病人となるのだと思つた。死んで元々であるならば、せめて今日一日を精一ぱい活きようと生きる氣力が明日を迎えてくれるように思つた。病は氣からという意味を励みにしたい。明日に望みをかけて戴く粥は薬にもなろうが、氣を病んでしまつと薬にもならないように思つた。

ホームドクターの選び方

- ・患者の疑問に具体的に納得のいく回答をしてくれること。
- ・患者の健康管理を任されているという、全身にわたり診察をしてくれること。
- ・「年だから仕方がない」等と言って患者の病氣に対する訴えを真剣に受け止めようとしない医者は避けること。
- ・良い医者とのつきあいは健康な時から時々健康チェックをしてもらい、貴方の体をよく理解してもらつておくこと。

完

◆道心・趣味の会◆

短歌

● まく水に息ようようと鳴く虫の
輪唱をあとに戸を閉ざしたり

● 秋の陽の強き畑の片隅に

● 茄の実一つ所在をしめす

東区 矢野 淑子

俳句

● 鰯ぼらとぶ夕上げ潮の周防灘すおうなだ

● 夜は魍魎ちみの頭飾らむ曼珠沙華まんじゅさくわ

東区 河野 貞女

● 木の実持つ箸置おかれ古希の膳

● 天高し老尼の説法澄みにけり

● 針を持つことほか知らず文化の日

● シンマイと読める母の字荷をほどく

東区 青笹 俊枝

◆行事報告◆七月～十月

● 七月三十日(日)

・お盆前伽藍掃除

沢山のご家族連れの皆さんのご奉仕で予定時間より早く終わることが出来ました。毎回同じ顔ぶれ

は大変心強いのですが、毎回限られたご家族の参加というの寂しい気もします。

● 本堂のお掃除をしながら檀信徒の皆さんの交流と相互理解の場となつてほしいと願つております。

● 八月六日(日)

・孟蘭盆会法要

日曜日とあつて例年よりご家族連れのお参りが多い法要でした。

● 九月三十日(土)

・青山俊童老師講演会

午前午後共に毎回参加の顔ぶれが定着した会となつたようです。

● 今回より東広島市西条町西条駅前中国新聞西条販売所のご協力を戴いて夕方の講座を開催しました。参加者は週末の午後五時半からでしたが、三十名の参加者がありました。

● 十月七日(土)

・お月見コンサート「Tsukimi in 寺」

大代啓二先生のフルート・青島広志先生のピアノとジョイント・コンサートに、四百五十人を越す聴衆が。十六夜の名月の元、名曲に陶醉しました。

◆行事案内◆(十月～正月)

毎週定例行事

● 晴天坐禅会 月曜日・金曜日
毎朝午前六時～六時四十分まで

● 水曜坐禅会

午後七時より坐禅・茶話会 終了
八時半

● 婦人坐禅会

毎週金曜日
午後一時より坐禅・茶話会 終了
三時

(第一金曜日のみ坐禅の後、写経・茶話会)

● 毎月定例行事

● 上田宗箇流茶道稽古日

毎月一回 第二又は第四金曜日の
予定 午後二時から
※お抹茶と和菓子を気軽に楽しむつもりでご参加下さい。

● 御詠歌の会

第二金曜日午前十時より自主練習
第四金曜日午前九時より講師を招いて練習 昼まで

◎ 茶道の稽古及び御詠歌の稽古は講師の都合により変更する場合もあります。初めて参加される方は、お寺に電話にてご確認ください。

● 毎年定例行事

● 臘八摂心坐禅会

十二月一日～八日(朝まで) 午前六時より一炷・午後七時より二炷(年内の坐禅会は八日の摂心終了をもってお休みします。)

● 新春坐禅会

平成十九年元旦 午前八時より

● 新年のご祈禱法要

平成十九年元旦 午前十時より
檀信徒皆様の一年のご無事を祈願する法要です。お参りされた方にお札を差し上げます。
(古いお札をご持参下さい。)
※お寺の寺務は正月五日より通常に戻ります。

● 恒例行事

● 年末大掃除のご案内

十二月十日(日曜日)
午後一時～三時位まで 終了後、希望者により忘年懇親会を開催します。(会費 千円)
お申込みは当日で結構です。
一年の力を落すつもりでご家族と一緒にご参加下さい。

墓地を利用される方にお詫び

本堂裏の墓地と駐車場横の墓地をご利用のお方には照明が壊れたままで不便をおかけしております。現在対策を練つているところです。暫くお待ち下さるようお願いいたします。

原稿募集

皆様の随筆、旅行記、体験談、趣味の短歌俳句など何でも結構です。お寄せ下さい。